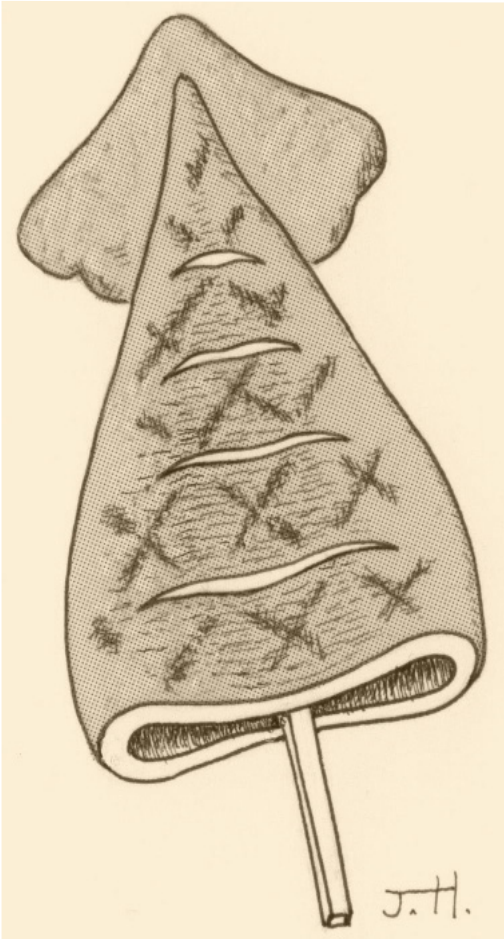


味の記憶

過ぎたるは人生、ほろ苦くてジヨツパイ！

—文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、
わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の
数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！



●しよっぱいものが大好き

手前みそだが、食べ物をさもうまそうに食べることは、自分の父ほどみごとに人はいないと思う。ご飯と味噌汁のみであろうと、漬物だけの膳であろうがお構いなし。背をぴんと立て、モグモグ・カリカリ・ズズズ・ピチヤピチャ、音を立てて食べるのは下品なのだが、その音がリズムカルで、食べる表情も豊かで多彩に変化するのがある。その様子はさも満足げで「口福」という言葉がぴたりと似合ってしまう。そして食べ終わると「うまかつた、牛負けたっ！ 母ちゃんのメシは最高じゃ」と決まり文句を吐く。すると母は決まり悪そうに当惑した顔をするのである。

その頃の父はめったに家で晩飯を食べることがなく、ほとんどが午前様。したがって、たまに帰りが早かったとしても、父のために用意しておく惣菜も残り物でたいしてない。しかも、父の食べ方は、残った惣菜にたっぷり醤油をかけ、また、味噌汁には唐辛子を振りソースをどぼどぼとかけ、丼飯には塩辛や梅干し、明太子やからすみ、ピク詰めウニや塩辛をたっぷり載せ、それが無い時には、醤油や生卵、マヨネーズなどをかけて食する。本来の料理の味付けなどその片鱗も残っていないのだ。

〈それを褒められても……〉母の当惑した心持がわかるとういうものだ。父にしてみれば、朝帰りばかりしている自分の不品行を責めるでもない母への贖罪と労りの気持ちもあつたのだろう。

しかし、わたしはめったに見ない父がさもうまそうに食べている様子を見て、「そうやって食べるとうまいんだ」と思わず興味津々になり、つい父の食べ方をマネしたくなる。

朝寝坊のわたしは、父や兄姉が職場や学校に出かけたあと、母が掃除や洗濯など家事仕事にかかっている最中に、一人で食べるのが日課になっていた。用意してある鰯の開きや卵焼き、のり、漬物や梅干しといったお決まりの朝膳だが、ご飯には醤油やゴマ塩、そして明太子やピク詰めウニに塩辛、さらにはマヨネーズをたっぷりかけて食べ、味噌汁には唐辛子をふりかけてという具合であった。兄や姉はピク詰めウニや塩辛は苦手のようなだったが、一番小さなわたしは大好物。「へんなやつ」とからかわれたものである。

もちろん母親に見つかろうものならNGである。調子に乗ってカラスミをひそかにパクパク食べて見つかったらこっぴどく怒られた。大事な父の酒肴だったのである。

とにかくわたしはしよっぱいものが大好きだった。おやつまでまだ

時間があり腹が減ったときには、紫蘇漬けのしよっぱい梅干しを漬物ビンから取り出してきては舂めなめ、沢庵漬けをバリバリバリ、といった具合であった。その因果がめぐってきたのだろうか、ついに急性腎臓炎になってしまったのである。以下はその顛末だ。

●肝油ドロップ事件

梅雨どきの雨の続く蒸し暑い日であった。外遊びもできず、家で一人ゴロゴロするしかない。たいてい、こういう日はチャンバラごっここの一人芝居をやるのが定番であった。

丹下左膳から始まり、鞍馬天狗、旗本退屈男、そして清水次郎長、という時代劇コースである。風呂敷を頭巾に仕立て、はたまた編み笠には台所の竹編みざる、外套にはテーブルクロスを引っ張り出してきて、着物は母の縫った木綿緋、そして、刀は和裁に使う長尺の物差しを代用とした。心はパンツマ（阪東妻三郎）やアラカン（嵐寛寿郎）、はたまた右太衛門（市川右太衛門）に千恵蔵（片岡千恵蔵）になりきって、「叩き斬ってやる、悪党」「うっ、やられた」とヒーローと敵役の一人二役を演じる。忙しいといったらない。

それをさんざんやりつくすと、家中とはいえ大立ち回りの後はさすがにお腹がすく。その日は母親も外出中で、

ひとりで家の留守番をしていたので、おやつはなし。いつものように台所から煮干しと沢庵を持ち出してきてバリバリ、そして梅干しを舐めなめ、しかしそれではお腹がおさまらない。米櫃を覗くと冷や飯も空っぽである。

ある。それをすっかり一缶平らげてしまったのだ……。

ウン唸っていたらしい。帰宅した母のすぐ知れるところとなった。真っ赤に腫れぼったい顔をしたわたしの異変に気付いた母は、やにわにわたしを背負って、行きつけの高見小児科に駆け込んだ。そこで、梅酒の残り梅をさんざん食べて急性アルコール中毒になったということがすっかりバレて、入院する羽目に。大騒ぎになったのである。

食卓部屋の食器棚に大事そうにしまつてあった肝油缶三つのうち一つをとりだしてきた。地球儀の形をした缶で、外側に世界地図が描かれている。半球体のカップが赤道上でパカッと二つに割れるようになってる容器だが、いまは嚴重にビニールテープで封印されている。そのテープをはがして、内包装袋の封を切り肝油を食べ始めた。バナナ味やメロン味、イチゴ味、オレンジ味など、ドロップ粒はゼリー状で、色も味も多彩で、これがなかなかいけるのだ。元はといえば、ビタミンAとDを主体に、さらにはCやカルシウムなどの摂取不足を補う栄養補助食品である。一日一粒か二粒程度が基本だが、それをパクパクムシヤムシヤ、まるでおやつ菓子を食べるように、あつという間に全部平らげてしまったのだ。

わたしは満腹感の中で急に眠気が襲ってきて、もろもろの心配などどうでもよくなり、寝入ってしまった。どれぐらいの時間が経ったのだろうか、重苦しい気分が目覚めた。昼寝したにもかかわらず、体が妙にだるく重い。そして熱っぽい気がする。

不安な気持ちに苛まれながらも、わたしはまた性懲りもなく、押し入れに隠れ潜むことにした。悪さをした時、母の劍幕から家の中で身を隠す場所は、わたしの中で四つの法則があった。まずは私にも言い分があつて母親に聞き入れられず意地を張っているときは屋根裏の小納戸部屋に引きこもる。母親の劍幕がすぐとどろりあえず緊急避難のときは縁側の縁の下に避難する。また、かくれんぼ感覚のいたずら遊びのときは五右衛門風呂の釜の中に隠れる。そして、最後に喧嘩や危険な遊びで怪我をして母親にそれがバレて怒られそうな時は押し入れに身を隠すのである。押し入れは布団が積み重なっているから弱った身体を休めるにはもってこいで、このときも、とにもかくにも押し入れ部屋に避難ということになったのだ。

それはかなり大きな缶で一人一年分の分量であつた。兄、姉、私用に、母が姉を通して学校に申し込んだ代物で

しかし、そのもくろみはあえなく破綻することにした。

これは余談だが、そもそもこうした

●押し入れに避難

へしまつた》

実は数ヶ月前に、母の外出時にお腹がすいて梅酒の瓶に残っていた梅をぜんぶ平らげてしまったのだ。この時はフラフラになり、いわゆる急性アルコール中毒の症状が出た。母にバレたら大目玉をくらうと思ひ、子ども部屋の押し入れに隠れ潜んでいた。しかし、酔っ払っているから、寝ていてもウン

これは余談だが、そもそもこうした

隠れ場所の入れ知恵をしてくれたのは兄サダオだ。ただし、兄の法則はわたしとはずいぶん年が離れているからスケールが違う。兄の場合は、まずは母の怒り度が最高潮のときは市内の叔母の家、数日母親の怒りが収まるまで帰ってこない。そして、一日くらいクールダウン期ですむ場合は近くの親戚の家か親しくしている近所のお世話になる。さらに一、二時間程度で収まる。と踏んだ場合は近くの土手林の中、家の中に避難の場合はもつとも軽い場合に限るのだ。いちばん多いパターンは、兄が縁側から飛び出して土手林に逃げ込み、母親が家箒を片手にこれまた縁側をジャンプして追いかけるというパターンである。

しかし、兄にも失敗はある。たまたま、悪さをしていたずら心で五右衛門風呂に隠れていたら、母がやにわに薪をくべるポーズをして、「釜茹でにしたる」と言い放ったときだ。兄は慌てて釜ふたから顔をだし降参した。すると、母親は力カカと笑い、してやったりの表情をした。このときは母の方が一枚上手だったのだ。

わたしの場合は母が怒っているときは、五右衛門風呂の釜の中には隠れないことにしている。というのも、父親が数日ぶりに帰ってきて風呂呂に入っているとき、母が不平を言う代わりに父への腹いせに私に手伝わせて薪をどん

どんくべて、父が「アチチ」と悲鳴をあげ慌てて水を足すまでやるのを知っているからだ。どこまで本気かと思ってしまうのだ。

ずいぶん話が脱線してしまったが、本題に戻ろう。そんなわけで、このときは子ども部屋の押入れに性懲りもなく隠れたのである。だが、学校から帰ってきた姉がわたしのもくろみをすぐ打ち砕いた。

「あ、肝油ドロップの缶が一つ空になってる、お母さん」

「ええ？」

「こんなことするのはセツオにきまつてるわ、お母さんセツオはどこ？」

「そりゃ、押し入れやろ」

とつづく見透かされているのだ。だが、こちらはそれどころではない。頭が熱でガンガンし、ふらふら状態である。

すると間もなく押し入れの引き襖が開けられた。にゅつと顔を出したのは姉である。

「肝油食べたんはあんたやね」

「うん」と弱々しく答えるわたし。

姉はじつと私の顔を見て、「どうしたん？ 顔が真っ赤に腫れてるやないの」と大声で叫んだ。すると母がすっ飛んできてその後はいつものパターン。わたしを背中に背負うと、土手を挟んで運動場を一気に駆け抜け、隣の中学校へ。とりわけこの日は土砂降り

の中だから大変であった。家から高見小児科医院までは大人の足でも有に30、40分はかかる。家には電話がないから、隣の中学校の宿直室まで行って、授業中の父に連絡をつけ、用務員さんにタクシーを呼んでもらい、高見小児科に駆け付けたのだ。

●高見小児科

医院は、ダークブラウンの板壁と漆喰の白壁のツートンの組み合わせでアールデコ調の造りがとてもモダンで、かすかにクラシックのBGMが流れ心地よい。いつも消毒液の匂いがして清潔感漂い、中に入っただけで、「もう大丈夫だ」という気分がさせてくれるのだ。

院長先生は細身の長身で、いかにも冷静沈着といった言葉が似合う上品なインテリ紳士。へどんなSOSのときでも、先生にかかればもう安心と思わせてくれる、町で評判の名医である。奥さんはヴァイオリニストで、医院の離れにレッスン教室をもち、町中の子弟に教えている。わたしの父が音楽教師であったこともあり、交流浅からぬ縁があった。小児科の二男坊は地元小学校に通っていたが、市内に通う兄とは同学年で友達付き合いをしていたのである。

しかし、わたしがここに駆け込むと

きはいつもきままってSOSの緊急事態である。先に述べた急性アルコール中毒の症状が出たときもその一例だが、

先だつては少し遠くに住むヤスサンの家まで遠征して帰りが遅くなり、近道の林の中を駆け抜けようとして、地べ

たに放置されていた有刺鉄線に足を取られて転んだ拍子に別の有刺鉄線が目

に突き刺さつて、あやうく失明しかけたときである。その前は、近所のマ

サアキと石頭比で頭突きっこをしていて、それがカナヅチでの殴り合いに

エスカレートして、ついに取っ組み合いの喧嘩となり、二人とも縁側から転

げ落ちて、運悪く縁石に頭をぶつけて

大量に出血したときである。この愚かな遊びは、当時プロレスブームで、石

頭で頭突きが売りのグレート東郷という人気プロレスラーを真似てのことだった。

そういえば、兄と二人乗りの自転車

遊びをしていて、わたしの足が後輪と

チェーンの間挟まれる事態になり右

足の内側の筋肉が張り裂けるような大

けがをした。その傷は今でも残っているが、このときも兄がわたしを押し入れに押し込めた。

「セツオ、大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

「ふとんにくるまっちょれ、母さん

に見つかると大変だからな」

「うん」

「まっちょれ、いまオキシドールと赤チンで消毒してやるから、それまで我慢せよ」

と、二人で内緒のやりとりをしていたら、タイミング悪く母が帰ってきて大騒ぎになったのだ。

ちなみに、このとき兄は、悪仲間の子の家に避難した。そのときのことを振り返り、今でも「あんときのお前は健気やった」とうそぶくのだが。

ともあれ、医院の専門は看板の通り小児科だが、わたしの場合は外科的SOSも多かった。もつとも、一番多か

ったのは、兄に張り合つて食べ過ぎてお腹を壊し、いわゆる糞詰まり状態になり、浣腸をやつてもらいに医院に駆け込むこと。ぶつといガラスの注射管

に浣腸液を入れて肛門から差し込むのだ。恥ずかしいったらありやしない。穴があつたら入りたいとはこの事だ。

しかし、今回はかなり重症の事態である。熱を測りお腹と背中に聴診器をあて、口腔内をのぞく。そして尿を採取

して下した診断は「うーんこれは、急性の腎炎ですな」と母に向かって告げる。動転する母親を諭すように「まあ、子どもの急性腎炎の場合、大事にして

いれば治りも早いから、そんなに心配する必要はないですよ。ただ、食事制限と安静が何より必要だから、しばらくはこちらに入院させましょう。いち

ばん気をつけなくてはいけないのは慢

性になることで、そうなると厄介ですから……」

即入院することになったのだ。最初の口ぶりとは違って、入院期間はずい

ぶん長く、たしか50日くらいだったような気がする。その後も自宅療養

による通院で三か月程、完治まで五か月近くはかかったと思う。子供の場合は原因不明の原発性のものが多いとい

われるが、わたしの場合は、細菌感染によるといふより塩分過多の偏食に原因があつたらしい。

●味気ないうがいの上なしの病院食

その闘病生活たるや、子どものわたしにとつてはイバラの道、人生初の難難辛苦といつても過言ではない。熱やむくみ、疲れやすいという以外に、これといった特段の自覚症状がないのだから、じつと寝ているのが辛いのである。それにもまして、わたしにとつては過酷な食事制限が大いに堪えた。

病院での治療は、すっぱい液体の薬と苦い粉末の薬の投与と病院食はもっぱら粥食が基本。食事療法がいはばん大切ななるが、タンパク質や水分の摂取量も制約され、とりわけ塩分は厳禁である。たんばく質は多く摂り過ぎると、腎臓からしか排泄されない尿素窒素やクレアチニン等が多くなり腎臓への大きな負担になるためだ。したがっ

て、たんぱく質は魚や肉だけではなく、ご飯、パン、芋類、果物、野菜などにも含まれているため、粥食がメインの粗食メニュー。とくに、塩分は腎臓でのナトリウムを排泄する能力が落ちているので極力控えることに。さらには、野菜や果物などもカリウムを多く含むので制限される。腎機能が低下して血液中のカリウム量が多くなり過ぎないためだが、海藻類もカリウムが多いのでアウト。みそ汁も塩分が強いので当然のことながらカット。こうなると、大方の食べ物が制限対象に入ってしまう。

これではもう食べるものがないようにも思えるが、たとえば、ほうれん草などの葉茎菜類やインゲンなどの未熟豆類はゆでると、 ω 3割のカリウムが除去できるので、細かく切って少量づつ食べ、塩分の代用にはレモンや酢等の酸味を利用するといった具合に、工夫次第で何とかなるのだ。唯一の楽しみは、少量のすり絞ったリンゴ汁くらいであった。まあ味気ないことこの上ない食事であったことは確かだ。

●塩気一切に法度の辛さ

だが、入院しているときはまたいい。半ば諦めもつくからだ。地獄なのは、退院して自宅療養に切り替えてからだ。

食事制限自体は病院のときと変わらず。なのに、周りの家族は食事制限なしの普通通りの食生活であるから、他人の膳がやたらと羨ましく気になる。皆は、しょうゆも塩気もきいた料理メニューで、塩分の多い漬物も食べ放題。みそ汁もぐいぐいいけるのだ。沢庵ガリガリ、生姜の味噌漬けバリバリ、梅干しをご飯にたっぷり混ぜてのご飯、また、納豆に卵と醤油をかけて掻き回しアツアツのご飯にのせて食べるのも思いのままである。おまけに、兄や姉はこちらが食事制限で食べられないことがわかっていいるから、余計これみよがしに目の前で食べてみせるのだ。

「おつ、マキコ、この明太子はおいしいな」

「うん、兄ちゃん。セツオの大好物だけど、まだセツオは食べられんよね」

「うん、かわいそうじゃが、俺たちであいつの分も食ってやるう」

「うん、兄ちゃん」
その声をわたしは無視するように、うつむきながら黙々と塩抜き粥を食べている。

「セツオがまんせえよ、もう少しの辛抱じゃ。よくなったら俺たちの分も食べていいからな」

こんな見え透いたことを、平然と笑いながら言う。なんてひどい奴らだ。まあ、そのような兄と姉に恵まれたこ

とを、天に呪うしかない。
「今に見とれよ、よくなったら、お前たちの好物を片っ端から盗み食いしやるから」

世に「食い物の恨みは恐ろしい」というが、その恨みは「三つ子の魂百までも」というように、わたしの中に深く刻み込まれたのである。

それにしても、塩気のない食事というのは、味にめりはりがなくて何よりつらい。おまけに大好きなお菓子も果物も制限中の身。当時は高級果物の部類であったバナナも、父が戦前の台湾育ちであったため、我が家では意外と豊富に手に入ったが、その好物も食べられないのだ。さらには、父が酔っ払って帰ってきたときの定番のお土産の、折詰の握り寿司や餃子や豚まんもお預けなのである。お先真っ暗である。それが食べられないと思えば思うほど、余計それらへの渴望も強くなるというものだ。

●一人遊びのチャンバラ

さて、高見小児科の院長先生の指示を厳格に守る母による厳しい食事制限管理の元、病状自体は順調に回復していく。おまけに、漢方好きの父の指示で、五苓散という漢方薬やサルノコシカケの煎じ薬も、あわせて服用していた。これが苦いのなんのって、鼻をつ

まんで飲んでもすぐに吐き出したくなるような、言いようのない味なのである。しかし、それも「一日も早く握り寿司を存分に食べられるように」「治ったら腹がパンクするほど豚まん餃子を食べるぞ」「四海楼（市内の華名店）の焼きそばが待ってるよ」と思えば、涎を垂らしての我慢である。わたしにとつては「人生初の刻苦勉励」であった。

その甲斐あつてか、症状もみるみる改善して、室内は元より庭先に出て一人遊びができるくらいに体力も回復した。そこまで元気になると、余計に食べ物への渴望も湧いてくる。やがてその渴望は妄想の域に達したのである。あいかわらずのチャンバラの一人芝居。家来は飼い猫のミーが一匹、雄猫だ。家来といつてもミーは縁側の干し布団の上でゴロ寝してこちらに視線を投げかけているだけなのだ。そのミーに向かつて語りかけながら、鞍馬天狗や次郎長を演じるのである。

「誰の差し金でやってきた？」「うるせえ死んでもらおう」「ちよございな、返り討ちにしてくれよう」云々と、一人芝居をやっていると、ミーはただジーンとこちらを見るばかり。それにも飽きたのだから、寝返り打って心地よげに昼寝に入ったのである。

するとミーの背中が、私には大好きな豚まんにも餃子にも見えてくるのだ

から不思議。挙句の果てには、ミーの白い腹が銀シャリに、背中が茶色の縞々の部分が、トロやハマチの寿司ネタにも見えてきてしまう。

「はあ、早く食べて〜」
と、ふとわたしの頭をよぎった瞬間、殺気を感じたのか、ミーはむつくと起き上がりひよいと縁側から家の畑の方に飛び降りて、いつものように小走りで逃げて行った。

「このままじゃ、頭がおかしくなりそうじゃわ〜」
と思うわたしであった。

そして、いつ先生の完治というお告げが下るか、じりじりと待ち続けること二週間。ようやく最後の尿検査を受けて、念願の「完治」という診断が下ったのである。

● 待望の握り寿司、豚まん、餃子を腹ごっばい！

わたしの快気祝いということで、珍しく父が晩御飯に間に合うように早く帰ってきた。しかも、わたしが妄想するまで渴望した、あの銀寿司（市内の寿司名店）の折詰の握り寿司と、ぶたまん（市内の餃子と豚まんの名店）の焼き餃子と豚まんのお土産付きである。

「治ったらこれが食べたかったんだろ、今日は存分に食べ」と、父が食卓の上にドーンと土産袋を載せると、母

が手際よく用意してあった大皿に盛りつける。

「わーい、今日は大好物ばかりや〜、なあセツオ」

「良かったね〜、おめでとう」と兄と姉はいつて、早くも食べる臨戦態勢に入る。

「ちよつと待たんか」と威厳をもつて制する父。

「お前たちは弟が病気で苦しんでいるのに、それに対して何の配慮も思いやりもない」

「兄ちゃん、配慮ってナン？」と、その言葉がまだ低学年の姉には難しすぎて兄にぼそぼそ訊く。

「氣遣いの事じゃ」と、兄がぼそぼそと答える。

「よく、わかるとるじゃないか、サダオ。だいたいお前は長男なんだから、幼い弟と妹を良い方向にリードしてやらなきゃいかん、わかるとるんか」

「はい」としょんぼり答える兄。
「まあ説教はこれ位にして、今日はみなで仲良く存分に食べ。ただし、今日はセツオが優先じゃからな、サダオとマキコは弟の分を横取りするんじゃないぞ」

「はい」と殊勝にこたえる兄と姉。
「さまあみる、わかっただか。今日は、大好物のトロとウニ、イクラ、それからバツテラは絶対に渡さんぞ」とばかりに、わたしは猛然と食べた。

ワサビがたっぷりきいた握り寿司を醤油皿にちよちよいとつけ、口におぼる時の“口福感”。これですよ、これ、わたしが待ち焦がれていたのは。すると、ワサビの辛さが鼻を突きぬけて涙がじんわりと出てくる。この瞬間がたまらないのだ。「子どもはサビぬきで」とよく言うが、わたしに言わせれば、ワサビのない握り寿司なんて握り寿司じゃありませんよ。

さて、目当てのトロ、イクラ、ウニ、そしてバッテラをほおぼる段階で、かなりの満腹感である。でも、年長の兄たちに負けるものかと、さらに豚まんや餃子へと少々無理して挑戦していくわたし。

こちらは酢醤油に和ガランを溶いて、そこに豚まんや餃子をたっぷりをつけて食べるのだ。その美味たるや、天にも昇る幸せ。これですよ、これ、わたしが妄想までして恋い焦がれたものは。

とまあ、幸せな快気祝いの宴が無事執り行われたのである。しかし、これにはやはり落ちがあった。喜び勇んで自分の小さな身体の消化能力を超えて食べた代償が待っていたのだ。またや翌日は糞詰まりで、性懲りもなく高見小児科に駆け込んで恥ずかしい思いをしながら洗腸をしてもらうことになったのである。

〈過ぎたるは及ばざるがごとし〉

以来、この句を一人ごちることのなんと多い人生であったことか……と自戒する今日この頃。いやいや、思秋期はまだまだ早いぞ！ とこれまた自戒する現在のわたしである。了